
あるエルレイドの物語

ロボット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるエルレイドの物語

【Nコード】

N4879I

【作者名】

ロボット

【あらすじ】

ポケモン達の世界、そこに暮らすとあるエルレイド達、そのエルレイド達がおきなす物語が今始まる。

そこで起こる危機。その危機に立ち向かう事が出来るのか？ポケモン達の物語が今ここに！

プロローグ

ここは、ポケモンだけの世界、
ここのとある森に、一匹のエルレイドがポツンと、歩いていた。
名前は、エールだ。

「えーと、あと十五分ぐらいでつくかな。よし、もう一息がんばろう。」

エールは、友人のサリーの家遊びに行くのだ。

サリーは、実はクレセリアだ。

だいたい分かるとは思うがサリーは、超強い、サリーとバトルして一度も勝った事がない。

で、こんな事を言っている間にいつの間にかサリーの家が見えて来た。

エールは、「よし、」と一言呟き、サリーの家へ走って行った。

だれもが、その後、たくさんの困難が、待ち受けている事も知らずに……

プロローグ（後書き）

こんにちは、ロボットです、この作品は初めてのやつなんでちょっと変なところもあるかと思いますがどうぞ読んでください。
ヨロシクお願いいたします。

第一話 早速バトル？エール爆睡？（前書き）

こんにちは、ロボットつす、これ第一話です。
結構変なところ多いですがヨロシクお願いします。

第一話 早速バトル？ エール爆睡？

「やっとついた。」、ちよつと走ってやっとサリーの家についた。相変わらず独り暮らしなのにけっこう大きい家だ。

玄関のインターホンを押すとすぐに出てくれた。

「はい、あっエール早かったわね、入っていいわよ。」と言われ、ドアを開けておじやましませす。」と一言いってから家にあがっていったら、びゅん、とサリーが現れた。と早速、「ねえーバトルしよーよ」といつてきつた。こうなれば、べつにいーよ。と言っほかない、一度断った事があるがその後サイコカッターを三発もくらったのは、今でも忘れない。でもバトルをしてもどうせ負けるのが目に見えてる。でもやれるだけやってみよう。と思ひサリーの家のバトルフィールドへ向かった。

そしてバトルフィールドに着いた二人は、少し間を置き、

「さあ、始めるわよ。」と言われ「う、うん」と合図をしたら、なんか急に始めていて、サイコカッターが飛んできた。急いで避けようとしたがちよつと傷を負ってしまった。

「ならばこっちは、つるぎのまい」 エールは、激しく踊って攻撃を高めた。

でもサリーは、手を抜かない、「まだまだ行くよ、サイコキネシス」でもエールは、華麗に避けて、「いけー、リーフブレード」と出すと、みごと命中

その後も色々な物理攻撃を命中させた。

つるぎのまいもあつて、みごとサリーに勝ったのである。

初勝利に大喜びのエールだったがふと我に返って倒れたサリーに気が付き、家まで運んで行った。

サリーをベットで休ませた後、他人の家をウロチョロするわけにもいかず、じっとしておく事にした。

サリーの部屋には、鉱石などの物がたくさん置いてあり、資料もいっぱいある、

サリーは、こう言うのは、なんだが、ヤバイほどの鉱石マニアだ。だが、エールは、サリーから鉱石の話を一度も聞いたことがないのだ。

だけど、明後日のサリーの誕生日に海辺の採掘場所でどっかのおじさんからもらった、ペナンなんちゃらか言う鉱石をプレゼントする予定だ、だから明後日までここに泊まることになってる。

「さて、何しようかな。」と、イスに座ったとたん、急に眠けがきて、意識がなくなっていった。

ドカと言う音で目が覚めたエールは、突然の体の痛み到我に振り返り自分がイスから落ちた事によやく気づいてはっと立ち上がった、眠ってしまったようだ。

「あっサリーは、何処だ」とベットを見るが、いない、サリーがいない、でも、下の階から何か聞こえてくるので、下へ降りていくとサリーがサイコキネシスでフライパンを操り、料理を作っていた。

「あっエール、もう起きたの、もうすぐできるから、ちょっと待っててね。」

いつの間にかさつきと立場が逆になっておりサリーは、すっかり元気になっている、

たぶんつきのひかりを使ったのだろう「ってあれ、もう夜じゃん、サリー今何時」

「えっあつうーんと今8時半だよ。」
「もうそんな時間！って事は、バトルしたのが2時だったから、えー！睡眠時間6時間。」
するとサリーが、「今夜は、眠れない夜になりそうね。」と一言言ってきた。
……「何もしないですよ。」怪しく思ったエールがサリーに一言言っ
といた。
「えっあつそんなつもりは、なかったのよ、いやべつに、」と言
訳をするサリーであった。

その後夕食を食べた二人は、明日の事について話あっていた。
「ところで、明日はどうするの。」
「明日は、まず、明後日の買出しに行つてそれから。」
「それから？」
「それから…遊ぶ！」
「ええー！遊ぶのーどこで？」
「知らないの！明日下町でお祭りがあるのよ。」
「あー夏祭りね、そうだったね。」
「そこでいっぱい遊んでくのよ。」

その夜エールは、ほとんど眠れずサリーから貸してもらった部屋で眠ろうとしていた。

それでも眠れず結局夜は、一睡もせずに朝が来た。
すると急にサリーが部屋に入ってきて、「おっはよう、昨夜はよく眠れましたか？」

「…サリーそれってもしかしていやみかい？」

「んな訳ないでしょーわたしは、友達にいやみはいわないのー」
妙にハイテンションなサリーについつい

(だめだこいつ、早く、なんとかしないと)とあのデ ノートのまねをしておもってしまった。

と、この話は、置いて、

そして二人は、スーパーが開いている10時に家を出てちよつと向こうのアマナキシティへ向かい歩き出した。

「あーもう疲れたー」、15分も歩いた所で早速文句を言ったのは、サリーだった。

「もう疲れたのー、早いよーじゃーここで休憩する?」

「うん!」

「じゃーどこで休憩しようか、この辺って泉とか池とかない?」

「この辺で一番近い所は、もう少し先にあるさんずい池だよ。」

「じゃーそこまでがんばっていこう。」

とこんな感じでもう少し歩かせる事に成功したエールであった。

しばらく歩くとさんずい池が見えてきた。

「きゅ休憩ー」と死にそうな奴みたいに池へ走って行くサリーにふつと軽く笑い

急いでサリーに付いていったのである。

さんずい池についた二人は、5分程休憩して、またアマナキシティへと向かって歩いて行った。

「ねえ、アマナキシティってどんなところなの?」

「ん、アマナキシティは、ここの辺じゃ有名な大都会だよ。」

「ふーんそうなんだじゃーいろんなものがありそうだね」

といってる間にそのアマナキシティが見えてきた。

そしてアマナキシティへ、入って行ったのである。

第一話 早速バトル？エール爆睡？（後書き）

次回予告

サリー

「ねえー次回は、どんなやつやるのー？」

エール

「知らないよ、作者さんどうなの？」

えー次回は、アマナキシティへ行くんですよ。

次回、テレポート&バトル大会

第二話 テレポート&バトル大会（前書き）

こんにちは、えーと今回は、ちょっとがんばりました。
ちょっと酷いところもあるけどまあいいでしょう。

どうぞ読んでください。

第二話 テレポート&バトル大会

こうして、アマナキシティについた二人は、早速買い出しをするためこの町の真ん中を通る商店街に向かった。

「ねえ商店街ってどんな店があるの？」

「えっ、例えば野菜とか肉とかとにかくいっぱい」

「で、あとどれくらいでつくの？」

するとサリーはちよっと笑って

「あと一時間ぐらい。」

「えー！まだまだじゃん、ってゆうか作者どんだけ広い町作ってるの！」

スミマセンいやー大都会って行ったら広くないとねーだって大だもん！

「だからってこんなに広くしなくていいじゃん…まあいや、こうなったら必殺技行きまーす。」

「えっ、必殺技？」

「行くよ、サリー僕に捕まって」

「うん」

「オッケーだねじゃー行くよ、テレポート」

その瞬間に二人は、一瞬にして消えた。

「あれっ…どこだっ？」

「ここは、商店街の反対側の入り口だよ。」

「えーじゃーさっき使ったのは、もしかしてテレポート」

「うん」

「じゃー最初から使ってればいいじゃん。」

「まあまあ、じゃ買い物買い物」

そうしてサリーが自分のバックから財布を取り出そうとしたとき、

「あー！！！！」

「どうしたの」

「さ、さ、財布忘れた」

「えーマジで」

どうやらサリーが財布を家に忘れてしまったようだ。

「どうする」

とそのときとある宣伝の声が聞こえて来た

「みなさんアマナキタックバトル大会今日開催ですよー、受付は、今日の11時までですよー

優勝者には、賞金3万ポケですよ、みなさんぜひさんかしてくださいアマナキドームで開催します。」

それを聞いた二人は、

「これは、優勝したら儲かるぞよし出よう」

「うん、そうだね」

「ところで今何時？」

「10時55分だよ」

「えーじゃー早く行かないとアマナキドームは、どこ」

「ここの北の方だよ」

「オツケー、じゃー捕まって、テレポート」

「ここは、アマナキドームだね」

「よし、早速エントリーしよう」

アマナキドームについた二人は、早速エントリーに向かった。

「すみませんエントリーしたいのですが。」

すると、受付のミニロップが答えてくれた。

「はい、あなた達が最後の参加者です、ギリギリセーフでエントリーできます。」

どうやらエントリーが出来たようだ、

「やったね」

「うん」
ということで儲かるという理由でタックバトル大会に出ることになった。

「さあ始まりましたアマナキバトル大会、今年の優勝者は、どのコンビなのか」
審判はこの私ライチユウのライイです。
ルールは、簡単とにかくバトル、アイテムあり、それだけ…あつあつと私がこれセコって感じたやつは、私が止めに行くのでそこんこヨロシク。」

ちよつとこの変なカンジの審判は、置いといて二人は、バトルの作戦を立てていた。

「えーとバトルは、どんな感じでいく？」
「まあどんだん攻めるでいいんじゃない」
「そうだねそうしようか」

という形で作戦は、どんだん攻めるになった。

まずバトル大会初戦は、どうやらブラッキーとエーフィのBEコンビいやブイズコンビだ
もう一方は、ブーバーとサマヨールのコンビだ。

「準備は、いいですか？、では、始め！」

つと始まった瞬間ブイズコンビのエーフィが一瞬にして消えた。
いきなり消えたエーフィに戸惑うブーバー達にエーフィが急に襲い掛かる。

「こつちよ、サイコキネシス」

素早い動きのエーフィのサイコキネシスが二人を捕らえた。そこでブラッキーが、

「これで終わらせる、あくのはどう！」

黒いオーラが二人を襲った。

どうやら一発で終わったようだ。

あまりの速さとあくのはどうの威力にエール達は、言葉が出なかった。

(これ、優勝出来るのかな?)

二人は、ついついそう思ってしまった、それほどの強さなのだ！

(いや、だけど勝てるかもしれない。)

そう思ったのは、エールだった。

実際エールは、あの強いサリーに勝った訳だし今回は、サリーが味方に付いている、きっと勝てる事を信じて、(ってゆうかまだあのコンビと戦うと決まった訳じゃないし、その前に負けるかもしれない)

そう信じて次の試合を観戦しに席へ向かった。

その後も白熱したバトルが繰り広げられ、とうとう二人の番が来た。相手は、仲の良さそうなエレブーとデンリュウのコンビだ。

「では、始め」

バトルスタートの合図が聞こえ早速攻め始めたのは、エール達だった。

「サリー、僕が攻めるから援護よろしく。」

「うん、分かった。」

「じゃー行くよ、リーフブレード」

猛スピードで相手に向かって行ったエールは、早速デンリユウにリーフブレードを当て、サリーが放ったサイコカッターもデンリユウに命中させ、デンリユウは、大きなダメージを負ったようだ。

「いってーなー、お前らちょっとくらわせたぐらいで調子に乗ってんじゃなーよ！」

「どうする、あれやるか？」

「そつだな決勝までとって置くつもりだったけどやるか！」

エレブー達が言っている事がよくわからないエール達だったがそのままバトルを続行する事にした。

「エールいくわよ、サイコキネシス」

「ふっ、効かぬは、10万ボルト」

サリーのサイコキネシスがエレブー達に向かって行ったが相手が繰り出したが、10万ボルトによって、相殺されてしまった。

「じゃーいくぞ相棒。」

「分かった、じゃー行くぞ」

『10万ボルト』

二人の10万ボルトが合わさってもものすごく大きな10万ボルトが飛んできた。

すごい威力の10万ボルトは、サリーに向かって飛んでいった、あの速さだと絶対に避けられない。

「サリー危ない」

ものすごい煙がフィールドを包み込む。

「ふう、何とか助かった」

「どうやらエールがテレポートを使ってサリーを助けたようだ。」

「あっありがとうエール助かったわ。」

煙が収まり地面の傷はものすごく激しいものになっている、おそらくかみなりの2倍以上の威力だろう、
いやおそらくあの伝説の鳥ポケモン、サンダーのかみなり位はある。

「サリー、この状況で長期戦は、きついわ早く終わらせないと」

「うん、そうだね」

「ここは、僕にやらせて！」

「いいよ、でも大丈夫？」

「うん、大丈夫じゃー行くよ、つるぎのまい」

エールは、戦いの踊りを踊って攻撃を高めた。

「くらえ、サイコネシス」

「ふっそんなの当たるか」

エレブー達は、簡単に避けた。

サイコネシスは、地面に当たってまたバトルフィールドは、煙に

包まれた。

「残念だったね」

「なんだと、うあー！ー！ー！！！」

「おい、どうした、なにっ！くそ、うあー」

煙が収まってエール達が出てきた、どうやら勝ったようだ、エールは、サイコキネシスをわざと避けさせ煙を巻き起こして、テレポーターで相手に近ずき、リーフブレードで切りまくった。
こうして第一回戦は、なんとか勝つ事が出来た。

その後、

「ねえエール、あのエレブー達がやっていた連携技、わたし達もやらない？」

「いいね、待ち時間も結構あるしね、でも何の技でやるの？」

「じゃーサイコカッターかサイコキネシスがいいんじゃない？」

「そうだね、じゃー早速練習しに行こう。」

こうして二人は、技を組み合わせる練習を繰り返す連携技を開発するため練習をしに向かった。

果たしてエール達は、優勝する事が出来るのか？
そして新技を完成させる事が出来るのか？

第二話 テレポート&バトル大会（後書き）

次回予告

エール

「作者さん最後までってどうなるの悪の組織って何？」

えーそれって今聞くか？普通。

エール

「教えてよ、おいおい」

わかりました、教えます。

えーと最後は、エール達がやられて悪の組織が世界征服します。

エール

「えー嘘でしょー！ー！ー！ー！ー！」

……嘘です。

つとこの話は、置いていて

次回、完成、サイコインパクト

エール

「えーさっきの話は、どうなったの？」

それでは、さようならー（逃）

エール

「えーちよっ、まってー」

第三話 完成、サイコインパクト（前書き）

こんにちは、ロボットっす。

今回は、みんな良く喋りますよ。

サリー

「ねえ作者さんは、なんでロボットって名前なの？」

えーこんな事言っていないのかな？

エール

「まあまあ、そうもったいぶらずにおしえてよ」

まあいいでしょう実は、……………

つま、後で教えます。

第三話 完成、サイコインパクト

エール達は、アマナキタックバトル大会の第一回戦でエレブーとデ
ンリュウ達の連携技に圧倒されたが

エールのテレポートのおかげで見事勝利する事が出来た。

そして、エレブー達が使った連携技を自分達で作る事にした。

連携技の開発をするため、森の中に入って来た二人は、やっと練習
ポイントを森の中の岩場に決め、早速計画を立て始めた。

「ねえ、まず組み合わせる技は、どうするの？」

「うーん、サイコキネシスとサイコキネシスとかかなー」

「でもまって、エレブー達が使った同じ技同士じゃなくても違う技
同士の方がいろいろいい事が
多いんじゃないの？」

「確かにそうかもしれないわ、もしかしたらその合わせた技の効果
をすべてつかえるかも」

「じゃーそうしよう、でも何を合わせる？」

「エールは、どんな技が使えるの？」

「サイコキネシスとか、サイコカッターとかかなー」

「じゃー、私がサイコキネシスを使うからエールは、他のを使って。

「えー何がいいかな、あーそういえば昔、お爺ちゃんからいつか役に立つからって、しんくうはって言う技を叩き込まれた事があったんだ、しんくうはならサイコキネシスとの相性がいいかも！」

「確かに、しんくうはなら必ず先制できるって言う効果があったはず、その威力が物凄く高かったらすごく強い技になるかも、」

「じゃー合わせる技は、サイコキネシスとしんくうはで決定だね。」

「うん、そうだね」

こうして合わせる技は、サイコキネシスとしんくうはになった。

そして二人は、やっと練習に取り掛かった。

「いくよー、せーの」

「サイコキネシス！」

サリーのサイコキネシスが岩のほうへ飛んで行く。

……「だめだめ、もう少し変化させて使わないと！」

「変化させてってどんなカンジなの？」

「えー、例えばサイコキネシスのエネルギーを丸くしたりとか？」

「うん、じゃーやってみる」

「サイコキネシス！」

さすがクレセリアだ、どうすればいいか教えてただけでもうコツを掴んだようだ。

「すごいよサリー、サイコキネシスの球体ができたよ。」

「エール早く、しんくうはをやって！」

「わかった、じゃーいくよ、しんくうは！」

サイコキネシスの球体にしんくうはが加わり巨大なエネルギー派がまわりに飛んで行く。

「すっすごい威力だ！」

周りの木々は、ズタズタになっており、岩でさえも砕け散っている。エネルギー派が収まり、二人は、疲れ果てて座り込んでしまった。

「すごい威力だったね！」

「うん、でさーこの技の名前付けない？」

「いいね、でどんな名前にする？」

「スーパーサイコキネシスとか」

「何それ、ネーミングセンス悪っ」

「じゃーどんなのにすればいいんだよ（怒）」

「例えば……サイコインパクトって言うのはどう？」

「サイコインパクト……それいいね!!!」

「じゃー名前は、サイコインパクトで決定ね！」

「うん、そうだね。」

「でも、こんな威力のやつしよっちゅう使ってたら体が持たないよ」

「そうだねー、じゃーこの技を使う時は、ほんとに負けそうな時だけね。」

「うん、そうしよう」

という訳で連携技、サイコインパクトを完成させる事に成功したエール達は、その凄まじい威力と反動の大きさに極力使わない事を決心し、アマナキドームに入ってしまった。

「すっすごいまたも一瞬での勝利だー」

ライチュウの大きな声が響きわたっている。

「あのエーフィとブラッキー達、また圧勝だった。」

「うん、あのコンビは、だいたいサイコキネシスで動きを止めてブラッキーの攻撃で終わらせるって言うコンボだったわね。」

「でも問題は、あのエーフィの速さだよな。」

「うん、あの速さは、まるでドラ　ボールみたいだよね。」

「確か首にこだわりスカーフを巻いていたよね。」

「うん、それにブラッキーの攻撃力は、異常だよね。」

「じゃーいい方法があるよ!」

「あのね、ぼそぼそ……」

二人は、ある秘策を思いついたようで、この秘策は、ブイズコンビと戦う事になったら分かります。

そしていよいよエル達の準準決勝の番が来た。

あいては、ヨガ教室を営んでいるチャーレムとマッサージ店を営んでいるツボツボの健康コンビだ。

「では、始め!」

すると早速ツボツボがサリーにからみつくをして、動きを止めた。

「くらえ、とびひざげり!」

動けないサリーにとびひざげりが飛んで行く。

「危ないサリー!サイコカッター」

とびひざげりをしようとしているチャーレムにサイコカッターが炸裂する。

「離して!サイコキネシス」

ツボツボは、宙に浮き、飛ばされて壁に激突した。

「いったたた、やるねー君達、でもそんなに僕達を甘く見ちゃだめだよ」

「でもあなた達も私達を甘く見たらだめでしょう!」
サリーがニコニコしながら言い返した。
するとエールがチャーレムの背後に現われ、

「後ろが開いてるねー! リーフブレード」

チャーレムの背中にリーフブレードが炸裂した。

あのリーフブレードを一発くらったただけでチャーレムは、もう気絶寸前にまでダメージを受けていた。

「えっえーあんなにくらったのって言うか俺つよっ!、まあ早く終わらせる! しんくうは」

ものすごいスピードで波動が飛んで行く。

やっとの思いで立ち上がったチャーレムにしんくうはが炸裂した

「じつこんなとこで!」 バタッ

チャーレムは、一瞬にして倒された。

ツボツボは、ビックリした様子だったがついに喋りだした。

「すっすいません、僕リタイアします。」

「えっえー………！」

ついつい二人から大きな声が響き渡った。

「とっと言うわけで勝者、エルレイドとクレセリアのチーム」

「やったわねエル、次は、準決勝だね。」

「うん、そうだね！よっしゃー次もがんばるぞ！」

こうして準々決勝も勝利したエル達は、この調子で優勝できるのか？

そしてエールの急激な成長はなぜなのか？

つとこの試合を観客席から見ていた一匹のグラエナが呟いていた、

「あのエルレイドとクレセリア、もしかして。」

果たしてあのグラエナは、いったい何者なのか！

第三話 完成、サイコインパクト（後書き）

次回予告

エール

「ところで、さっきのやつ教えてよ。」

はいはい、実は、僕、スマブラのロボットが得意っていう理由なんです。

エール、サリー

「えーーーーー、それだけ!!!!!!」

はい、それだけです。

ではっ！

次回、決戦、ブイズの脅威

第四話 決戦、ブイズの脅威（前書き）

こんにちは、ロボットっす。

今回の第四話は、ちょっと短いです。

どうぞお読みください。

第四話 決戦、ブイズの脅威

エール達は、チャーレムとツボツボの健康コンビに圧勝し、練習をしにあの森の中にまた来ていた。

「リーフブレード!」

エールのリーフブレードは、岩に当たり岩は、粉々に砕け散った。

「すすすごい、こんなに強くなってるなんて」

サリーが驚きを隠せない様子だ。

「ねえエール、他の技もやってみてよ!」

「うん、やってみる」

エールは、他の技もやってみることにした。

「サイコキネシス!」

エールのサイコキネシスは、木に直撃して、木は折れて倒れてしまった。

「すごいわ、こんなに強くなってるなんて思わなかったわ!」

エールは、ものすごく成長した事にビックリしていた。

エールは、なぜこんなに強くなったのだろうか?

つとエール達は、練習を止めてアマナキドームに来ていた。

試合を見ると、もうバトルが終わっていた。

「次は、僕達だね、行こう。」

「うん、行こう。」

二人は、準決勝の始まるフィールドへ向かった。

「さあー始まりましたアマナキタックバトル大会準決勝、第二回戦、両者準備は、いいですか？

それでは、始め」

相手は、またサンダースとブースターのブイズコンビだ、

「こっちから行かせてもらっよ、しんくうは！」

ものすごいスピードの波動がブースターめがけて飛んで行く。

「はっ速い、ぐう！」

ブースターにしんくうはが当たりブースターは、バランスを崩した。

「サリー、僕がブースターをやるからサンダースをお願い。」

「ええ分かったわ、サンダースね！」

「じゃー行きますか、サイコネシス」

エールのサイコネシスは、ブースターの方に飛んでいった。

ブースターは、軽々と避けてこっちに攻撃をしかけてきた。

「こっちも行くよ、かえんほうしゃ！」

ブースターのかえんほうしゃは、ものすごく速く当たってしまった。

「まだまだーかえんほうしゃ」

かえんほうしゃがどンドン飛んできて、エールには、五発くらい当たってしまった。

「そんなの効かないよ、サイコカッター」

サイコカッターは、ブースターの顔面に直撃してブースターは、倒れこんだ。

「これで終わりだよ！テレポート」

エールは、テレポートでいっきにブースターに近づいた。

「リーフブレード！」

ブースターにリーフブレードが炸裂してブースターは、気を失った。

その頃サリーは、サンダーズと戦っていた。

「くらえ、10万ボルト！」

「やっぱり、速いわね、サイコカッター」

「あんたも速いね、ならばでんじは！」

サリーにでんじはが当たりサリーの体は、麻痺してしまった。

「あなた、まだまだ甘いわね、サイコソフト！」

「なにつサイコソフトだと！」

サンダースに麻痺が移され、サンダースの動きは、鈍くなった。

「くらいなさい、サイコカッター！」

動きの鈍くなった、サンダースにサイコカッターが三発直撃してサンダースも気絶した。

「勝者、エルレイドとクレセリアのコンビだー！！！！！」

準決勝も見事勝利したエール達は、決勝でのブラッキーとエーフィのコンビとのバトルを前に準備をしていた。

「エール、あの作戦だよな。」

「うん、分かってるよ。」

エール達は、十分回復してから、バトルフィールドへ向かった。

「いよいよ来ました、アマナキタックバトル大会決勝戦、両者準備は、いいですか？」

両コンビのポケモン達は、軽く頷いた。

「では、始め！」

始まったと同時にエーフィの姿が消えた。

「行くよサリー、テレポート！」

エール達は、所々ワープして相手の目を惑わした。

「くっそー何処にいるんだ！」

「ここだよ、リーフブレード！」

ブラッキーの背後からリーフブレードが炸裂した。

「ふっ効くか、あくのはどう」

ブラッキーのあくのはどうは、サリーに当たり、サリーは、飛ばされて壁に激突した。

「サリー大丈夫？」

「う、うんなんとか」

「あなた、隙作っちゃだめでしょう、サイコネシス！」

背後からエーフィが現われ、サイコネシスでサリーの方へ飛んでいった。

「くっやるね、しんくうは、そしてテレポート！」

エールが飛ばされている最中にテレポートをしたそうだ、

しんくうはがブラッキーに当たりブラッキーは、怯んだようだ。

「こっちも見なよ、サイコカッター！」

サリーのサイコカッターがエーフィに当たった。

「サリーその体！」

「そうよ、あなたが戦ってる間につきのひかりで回復させてもらったわ」

「あんたやったわね、許さないわよー！」

あいてのエーフィは、どうやらキレてしまったようだ、これは、まずいかもしれない。

果たして、エール達は、このエーフィ達に勝つ事が出来るのか？

第四話 決戦、ブイズの脅威（後書き）

次回予告

えーとですね、次回は、とうとう決着ですね。

次回、決着、サイコインパクト

エール

「ってか、三話と題名がぶってない？」

まあそんな事は、置いといてさようならー（逃）

第五話 決着、サイコインパクト（前書き）

こんにちは、ロボットです。

マジでぜんぜん投稿しなくてすみません。

エール

「何で投稿しなかったのひまだったよー、作者のバカバカ!!」
いやいろいろ事情があつてですねー

サリー

「うるさい、うるさい!!」

スミマセン、スミマセン、

サリー

「……………コロス!!!!」

えっちょまっ、ぎゃああああああああああ

第五話 決着、サイコインパクト

「くっそー、イライラするわー、あいつら、ちょこまか動き回りやがって！」

エーフィが物凄い口調で怒鳴っていた。

「サリー、相手のエーフィをお願い」

「分かったわ！」

「逃がすか！あくのはどう」

ブラッキーがサリーに向けてあくのはどうを放った。

しかしあくのはどうは、エールが放ったしんくうはによって相殺された。

「きみのあいては、この俺だよ！」

エール達は、サリー達が戦ってる場所から出来るだけ離れた所へ移動した。

その頃サリー達は、白熱した戦いを繰り広げていた。

「くらいなさい、サイコカッター！」

「そっちこそくらいなさい、サイコキネシス」

相手のエーフィのサイコキネシスがサリーに直撃したがサリーには効果いまひとつ、ひるむことなく
サリーは再び、

「サイコカッター！」

サイコカッターはおしくもはずれたが相手はそろそろ限界なほど怒っていた。

「くそー、ムカつくんだよ、クレセリアかなんだか知らないけど！
！」

エーフィはもう女ではないほどの口調で喋っている。

「そろそろ終わらせるわよサイコカッター！」

サリーが連続で放ったサイコカッターが相手のエーフィに直撃し、あたりは砂ぼこりがあがった。

「ふう、やっと終わった、エールのところに行かないと！」

エールは相手のブラッキーと戦っていた。

「くらえ、あくのはどう！」

「甘いね、しんくうは！」

再びあくのはどうを相殺し、二人はさらに激しい戦いを繰り広げていく。

「つぎは物理戦だ、いくぞ！シャドークロー！」

「受けてたつよ！リーフブレード！」

二人の攻撃が激しくぶつかり、観客の声援も激しくなる。

「くっ、やるな、だが俺もそう簡単にはやられないぜ」

「くらえ！リーフブレード！」

リーフブレードが近づいているのにもかかわらずブラッキーは動こうとせず、軽い笑みを浮かべている

そしてそのままリーフブレードをくらったブラッキーはエールの腕をつかみ反撃にかかった。

「甘かったな、くらえ！しっぺがえし！」

エールは相手のブラッキーのしっぺがえしをくらってしまった。

攻撃力が高いエールのリーフブレードでしっぺがいしはかなりの威力はかなりの威力だろう、

もうエールの体力は危ない状況だろう。

「はあ、はあ、今のはきいたよなかなかやるねー、あそこでしっぺがえしをするとは。」

「おまえもばててきたかこれで終わりだ！あくのはどう」

エールに向かってあくのはどうが飛んでいく、そのとき横からサイコッターがきて、

あくのはどうを相殺した。

「おまえなぜ？、くっあいつがやられたのか」

「サリー、きてくれたの」

「ええ、エールがのろのろしてるからきてあげたのよ」

「ありがとう、いくよサリー」

エールとサリーがブラッキーに向かっていったとたん、さらに横からサイコネシスがきてサリーにあたった。

「あなたまだ立てるの、すごいわね。」

あのエーフィーがまだやられてなかったようでサイコネシスを放ってきた。

「あーきたか、おいあれをやるぞ。」

「あれね、わかたっわ、いくわよ『しんそく』！！」

二人は一瞬にして消えたそしてさまざまなところから攻撃をしてきた。

「は、早い何だこの技は！」

「くっ、このままじゃやられちゃうわ、どっしりするっ。」

「俺たちもアレをやるっ。」

「仕方ないわやりましょう、いくわよサイコネシス！」

サリーのサイコネシスが球体になりエールがしんくうはを放った。

「いくよ！しんくうは！！」

そして前と同様たくさんのエネルギー派が飛んでいき、相手の二人に炸裂した。

「くそっ！なぜだ、俺たちがなぜ！ぐあーーーーー」

二人はぐったりとして動かなくなった。

「おーっついに、ついに終わったようだー！優勝はエルレイドとクレセリアのチームだーーーー！！！」

「やったわ！エールついに勝ったわ！」

「ついにやったねこれで買い物がたくさんできるね。」

こうしてエールたちは数々の死闘を終え買い物に向かったのだった。

それから2時間後

「えー、まだ買うのー？」

「あと少しよ我慢しなさい！」

まるで親子みたいなしゃべり方だがこの二人は昔からのおさななじみである。

「あとどこいくの？」

「あと肉を買いに行くの、あとちよつとよ」

もう一度言つがこの二人はただのおさななじみだ、決して親子ではないです！

その後肉を買い必殺技レポートで帰宅、5時から祭りに行った。

太鼓の音や盆踊りのゆかいな音楽が鳴り響きさまざまな店が立ち並び、

大勢の人々がぞろぞろと動いている。

「人多いねー、どこ行く？」

「どこも人多いからねー、困ったなー」

となんやかんや遊んで7時に帰宅し、あしたの下準備をしてから早めに二人は眠りについたもちろん違う部屋でね。

こうして明日は誕生日パーティださ、て誰が来るのかな？

第五話 決着、サイコインパクト（後書き）

次回予告

はあ、はあ、死ぬかと思った。

サリ―

「ごめんなさいねちょっと頭に血がのっぼって。」

いいんですよぜんぜん投稿しなかった僕が悪いんですから。

（でも頭に血が上るとあんなことするんだ―）

サリ―

「ん？今なんか思った？」ニヤリ

ひゃ―なんでもないです、なんでも。

エール

「ところで次回はどうなるの？」

次回は誕生日パーティーです。

次回、盛り上がっていきこうぜー、誕生日パーティーだー ですよ。

お楽しみに―

第六話 盛り上がっていきーぜー、誕生日パーティーだー（前書き）

こんちわロボットです。

今日は誕生日パーティーです。

結構がんばりました。

感想、評価待ってます。

どうぞ！！

第六話 盛り上がっていきーぜー、誕生日パーティーだー

あるエルレイドの物語前回は、アマナキタックバトルでエーフィとブラッキーの驚異的な実力に圧倒されたが二人の連携技サイコインパクトにより見事優勝した。そしてサリーの誕生日の朝を迎えた。

「むにやむにや、あれもう朝かー」

きずけばまだ早朝サリーはまだ寝てるようだ。

「どうしよう…サリーを起こすべきかな？」

「いや、まだ寝かせておこうかー」

こうしてエールはまだまだ暇な時間をすごすことになった。

五分後

「あー暇だーやることない」

十分後

「ぐあああああひーまーだー」

三十分後

「ぐーがーぎゃーヴーヒマダ……ウー」

「こうなったらサリーを起こすしかない」

こうしてサリーを起すためサリーの部屋にやってきました。

「サリー、起きて、おーいサリーー！」

「むにゃむにゃ、んー………きゃー………へんたー……
いー！」

「え？そんな、なんでぎゃあああああ」

それからちよつとした後

「ゴメンゴメン、ホントゴメン！」

「もーサリーったらいきなりへんたーいなんていってサイコカ
ッターおみまいするなんて
ひどいよ。」

「ぐめんっていつてるでしょ、それにいきなりきたのはエールでし
よ。」

「確かにそうだね、だけどひまだったんだもん！」

「まあもつすぐみんな来るから準備しないとね。」

「うんそうだね、早く準備しないと。」

こうして二人は後で来るみんなを準備しながら待っていた、みんな
の詳細はのちほど。

そうこういつている間にもう一人目がこっちに向かっていた。

「ふう、やっと見えてきやがった、つかれたぜ」

ピンポン、インターホンの音が鳴り、一人目の客が来たようだ。

「はいはい、いったい誰かなー」エールがドアを開けて出てみると。

「ようエール、うまい物用意してんだろー」

「やあ、ボルト、君が一等賞だね！」

「なーに言ってたんだ、エールは昨日から来てただろ！」

「そうだったねー」

「ばーか」

「ふふつ、さあ入って入って。」

「おっじゃましまーす」

ボルトは小学校のころからの親友のレントラーでサリーとも仲がいい、だからもちろん招待した。

「サリー誕生日おめでとう。」

「ありがとうボルトこれからもよろしくねー！」

「これからもなんかあったら俺に相談しに来いよ」

ボルトはなにやら大きな荷物を隠すように他の部屋に置いた、おそろくプレゼントだろう。

「あと三人だね早く来ないかなー」

待つこと十分

ピンポンまたインターホンがなった。

「今度は誰かな」、再びガチャと玄関をあけた。

「あらエールおはよう、朝早くから出てつかれたんだからね!」

「やあ、ミロル遠くからどうも、さあ入って」

このミロルはバトル大会で知り合った、甘く見てたら顔面にほのおのパンチをくらって一発でKOと言う苦い思い出があるがすぐ仲良くなったミニミロップである。

「サリー誕生日おめでとう」

「ありがとうミロル、またどこかに遊びに行こうね」

「うん!」

あと二人だねまだかなー

そのころあと二人はゆっくりとサリーのうちへと歩いていた。

「早く来いよコーエン」

「ハーク、ちょっとくらい待ってよー」

「ほら見えてきたぞコーエンがんばれ」

「えっ水が飲みたいー！ー！ー！」「ビュン！ー！」

「コーエンのやつこつこつゆう時だけ早いんだからなー、俺も行くか」

ピンポンまたもやインターホンになる。

「はいはい、今出まーす」ガチャ

「おはよー、みっみずをくれー」

「ようエール久々だな今日は呼んでくれてサンキューな！」

「うん、ところでコーエンはどうしたの？」

「すまない許してやってくれ、あいつのどが渴いてるみたいでな」

「まあいいよ、コーエンはいつもの事だしね、さあ入って」

さっきのコーエンがコートスでハークのほうがハッサムであるあの二人は昔からの親友みたいでいつも一緒にいるところを見る。

「誕生日おめでとうサリーー」

「ありがとう、コーエンにハーク！」

「これでみんなそろったなさてとお昼にするか」

ボルトが言ってみんなのテンションも上がってきた。
食事の準備が整ったところでみんな食べ始めた。

「ところでエール達昨日は何してたの？」

ミロルの質問にエール達はきのうの話をした。

「なるほどエール達はすごいね、サイコインパクトって言うのを作ったんだーさすがこの二人だね。」

コーエンがほめた

「ところでもちろん昨日の夜は一緒に……」
ハークが言った

「そんなことあるわけないじゃないの……」
「あるわけないよねそんなこと……」

エールとサリーが顔を赤くしてしゃべった。

ああ見えてもハークは結構変体なこと言うやつだ。

「さてと昼ごはんが終わったから何する？」

「しばらく最新ゲームフィーでもやる？」

もちろんウィーのパクリですがお許しを。

こうして3時までフィーをやりまくった。

「サリー」

「何？」

気晴らしに港町の海辺に二人で行かない？」

「でもご飯は？」

「あの四人がやるって」

「じゃーいいよー」

エールとサリーは二人で散歩に行った、これも作戦のうち。

サリーがいない間に四人でバースデーケーキを作り料理も作るとうわけ

え？あの三人は大丈夫かって？

もちろんたんまり練習していたそうです。

そして二時間後

「ただいまー」

エール達が帰ってきた

「お帰りー料理も出来てるよ」

どうやらもう出来てるようだ、ミロルとエールがひそひそ話

【どう？出来た？】

【オーケイだよあとは出すだけ】

どうやら準備はオーケイみたいだ、そして誕生日パーティの始まりだ

豪華なディナーをたんのうしていよいよケーキが登場。

『ハッピーバースデーサリーおめでとう』

「みんなありがとうね」

サリーはちょっと涙目を浮かべている。

「あとプレゼントもあるよ、みんなー持ってきて」

全員がよさそうなものを持ってきている。

コーエンはサリーが好きな鉱石のネックレス

ハークはかなり高い鉱石のちりばめたスカーフ、特殊な効果が発動するらしい

ミロルはサリーが持っていない鉱物セット

ボルトは鉱石採集キット

そしてエールはペナンなんかやらをプレゼント

「はいサリー」それを見せた瞬間サリーの目が一変した

「エール、これどこで手に入れた？」

「ん、どっかのおじさんから貰ったんだけどどうかした？」

「いっいやなんでもない、さあ、次いこー」

「じゃー乾杯しますか」

「おれは酒は無理だからお茶でいいや」

エールは酒にもものすごく弱く一口で激酔いしてしまっ。

こうして誕生日パーティは無事に終わった、だがサリーのあの顔何かあると感じていたこと
サリーが酒に酔って大暴れしてエールに抱きついた光景が頭から離れない

こうしてみんなここで泊まり明日帰ることとなった。
果たしてあの鉱石はいつたい何なのか、新たな旅が始まるうとして
いる。

第六話 盛り上がっていきーぜー、誕生日パーティーだー（後書き）

どうでしたか？すごかったですか？

サリー

「おい！そのあんた何言ってるのよ、あー！..!」

まさか酔っ払ってる……やめてー！..!..!..!

ぎゃあああああー！..!..!..!

エール

「まあがんば、えっこっち？ぎゃあああああー！..!..!..!」

ふう、たすかったー

次回 新たな旅の始まり

第七話 新たな旅の始まり（前書き）

どもロボットです。

なかなか投稿しなくてすみませんでした。

今回は少し短いです、すみません

ではーごうぞー！

第七話 新たな旅の始まり

昨日の誕生日パーティーでは、サリーを祝うため、エールを除きボルト、ミロル、コーエン、ハークの四人がやってきた。

そして次の日の朝。

「おっはよーみんな朝だよー！」

「あーサリーか、俺はもうおきてるぜ」

「わたしもおきてるわよー」

「俺もおはよう」

「あれ、エールは？」

ボルト、ミロル、ハークはもうおきているようだ

しかしエールがいない……………

「エール！どこにいるの？」

「サリー？ここだよ」

「どい？」

「屋根の上だって」

どつちら屋根の上にエールはいたようだ、やっときた。

「みんなおはよー」

「ところでコーエンは？」

「あれっそういえばそうだな」

「むにゃむにゃ、もうおなかいっぱいだよー！むにゃむにゃ」

「コーエンはどうやらまだ夢の中……………」

「ここでお世話係、ハーク参上ー！」

「おきろー！コーエンー！ー！」

「むにゃむにゃもういらないうつばー」

「むっ！ー！くらえー！ー！アイアンヘッドー！ー！」

「ぐはっ、いててて、何するんだよいきなり！ー！」

「何って！お前がおきないからだろ！ー！」

「いい夢見てたのに酷いよ」

「所詮夢は夢だー！」

「うー……………」

まあこんな二人の言い合いも無事終わり朝食が机に並んだ。

「さあ、食べましょう」

サリーがいただきますをし、みんなで食べ始めた、

昨日の盛大なパーティのおかげで食料が……

メニューはご飯と味噌汁！

『……………』

このメニューのせいなんだな！そうだよな！ 何熱くなってるんだよ！

てな感じで今回の誕生日パーティはお開きと……ちなみにエールは片付けのお手伝い

ガチャガチャ、ウイーン

エールは皿洗い、サリーはお掃除を実行中……………

しかし昨夜のサリーのあのときの顔、いったいなんだっただらう？

とこんなことをエールは思っていた。

「ねえ！エール」

「何？」

この言葉がすべての始まりとなるだろう。

「あの昨日貰った鉱石だけど・・・」

「ん？」

「実はね・・・」

「??？」

「私あんなもの見たこと無いの・・・この世界中で見たのは初めてなのよ・・・」

「えっ！そうなの？」

「ええ・・・おそらく・・・だから一つお願いがあるの・・・」

「何？なんだって聞いてあげるよ」

「あのね・・・ある博士のとこまで旅に行くの、だから一緒に来てくれない？」

「え！うーん・・・」

「お願い!!」

「いいけど……」

「新しいゲーム買ってあげるから!」

「え!!ぜひ行かせてください!!」

「よし!決まりね!明日から出発よ!」

「りよ、りよーかいしました。」

てなわけで新たな石とある博士に見せるため、エール達は旅に出ることになったのである。

え?荷造り?エールの服とか?、家にとりに帰るに決まってるじゃないですか!

どうやって?って……あれあれ、必殺技ですよ!

まあ今日は荷造りをして、次の日。

「さあ、いくわよ!おきなさいエール!」

「うん……」

早速家を出た二人は博士の研究所へと向かうためやや北東の方角へ歩き出した。

十分後

「でもさー、サリー、博士のどこ言って何するの？」

「ん？あの石はもしかしたらかなりすごいかもしれない。相当な値段がつくかも……」

「……あのおじさん、だれだったんだろう？」

そしてその後三十分歩くと新たな村、フエルト村が見えてきた。

「あ！村だ、さあ行こう！サリー」

エールの声で二人は駆け足で村へ向かった。

そのころとある場所では、

「報告！報告！」

「なんだ？」

「アマナキにあの力を持っている可能性がある二人を見つけました！エルレイドとクレセリアです。」

「そうか、本物が調べて来い！」

「了解しました。」

さあ、新たな旅に待ち受けるものとは！

第七話 新たな旅の始まり（後書き）

次回予告

エール

「やっと旅が始まったね」

はい、ついにです。

サリー

「本当の物語はこれからよ！」

はい、そうですね。

次回、フェルト村での新たな出会い

お楽しみにー

第八話 フェルト村での新たな出会い（前書き）

どもーロボットです。

最近ちょい短くなってます。

すみません！

今回は……

どうぞ！

第八話 フェルト村での新たな出会い

「ふう、ついた！」

エールは大きく深呼吸！

「はあ、はあ、疲れたー・・・」

サリーは木にぶら下がっている！ なんでー？

二人は旅に出て始めて村、フェルト村についた。

エールにはそこが地獄！

まずサリーのマニア領域に付き合っ！

次に不良に絡からまれる・・・

さらに今度は犬に追いかけられる。

そして一番つらいのが・・・

サリーが助けしてくれない！！！！

「はあ………」

「おい、さっきのやつがいるぞ！」

「あ………」

エールに絡んだやろうだ……

「おい、さっきちょっとサツ（警察）に捕まっちゃったからイライラしてんだよ……！」

（しらねー、俺に当たるな！バカ）

エール！いけ！ボコボコにしる お前はうるさい！

「金ちょうだいよ！」 は？

エールの周りにやろうが集まる……そのとき！

「やめとけよ！アホか？」

「ん？誰だ？」

「俺？通りすがりの人さ！」

そこにたっていたのは一匹のザングース

「お姉ちゃん、いいスタイルしてんじゃねーかよー」

サリーも変なの（ブーバー）に絡まれていた。

「3」

「んー何言ってるの？それより俺んちこな」

「2!」

「行こうよ行こうよ!」

「1!!--!」

「0・・・じゃーねー」

「ん？なにが・・・ぎゃあああああああああああ」

よく見るとさっきのやつはサリーにぶっ飛ばされたようだWWW
笑うな!

しかも遠くの山に刺さってるし、ぶぶっ だから笑うな!

「あ・・・サリーいたいた」

「エール!それにそこの方は?」

「ああ、俺はジーク、よろしくな！あんたがサリーか？」

「ええ、こちらこそ」

「ところでジーク！」

「なんだ、エール？」

「僕とバトルしない？」

「は？お前弱いだろ！さっきだって・・・」

「まあまあ、そういわずに」

「ちっ！わーっただよ」

っという感じで二人はバトルすることになった

「いくよジーク！」

「こい！すぐ終わらせてやるからよ！」

「それじゃーいくよ！リーフブレード！……！」

エールがジークに飛び掛る！・・・しかしジークは動こうとせず攻撃態勢に入った。

さっきやっていた瞬殺の技だ！

「ふっ、甘いな！さっきも見ていただろう！喰らえ！ザンテツケン
！！！」

エールはとつさに反応していたため、かわすことができた。

しかし相当の威力だ、それに・・・名前パクってね？ ならそんな
名前にするなよ！！

「ジーク、なかなかやるね！さすがだよ！」

「おいおい、お前にいわれてもうれしくねえよ！」 きずかないね
！・・・

「それはどうか、じゃそろそろ本気で行くよ！しんくうは！」

勢いよく、まっすぐに飛んでいく衝撃派はジークの足に当たり、怯
ませた。

「まだまだ！テレポート！」

ジークの後ろに回ると、リーフブレードで攻撃！！ お決まりの

ww

ジークはエールのリーフブレードの威力にもうボロボロ・・・

「ちっ！やるじゃ ね え か・・・」 バタッ！

すごい！もう倒したよ！さすがエール！

「やるわね、エール！さすが！」

「そんなこと無いって・・・」

ってな感じであっさり勝利してしまった、

「ところで・・・エール！・・・この人どうする？」

「うーん・・・いったん目が覚めるまでまとう！」

「ええ、そうね」

15分後

「ん？・・・ここは？」

「やっと目が覚めたね」

「あーおいエール！お前は弱かったんじゃない・・・」

「それは勘違いだよ！」

「そうよ！この前だってバトル大会で優勝したんだから！」

「そうなのか？・・・やるなあ、おまえ」

「そうか・・・だから旅をしてるのか・・・」

「うん、さて！僕達はもう行かないと・・・こんなところもうゴメンだよ」

「そうか・・・まあ、元気だな！」

「うん、ありがとう！それじゃーねー」

こうしてエール達はフェルト村を出たのである。

「・・・」

ジークは思いつめた顔をしていた・・・

エール達、歩くこと10分

「さあ！咲きを急ごう、サリー」

「ええ！」

つと話しながら歩いていると……

「待ってくれー！！」

そこにいたのはジークだった。

「ジーク！何で？」

「頼む！俺を連れて行ってくれ！」

『ええー！！！！！！！！』

「……だめか？」

「うーん、別にいいけど・・・」

「よっし！なら決まりだ！よろしくな！お二人さん」

「え！ええ」

こんな感じで新たな仲間、ジークが加わり、旅が始まった。

新たな旅が始まる！

第八話 フェルト村での新たな出会い（後書き）

どうでしたか？新たな仲間！ジークです。

名前はメタルギアソリッドピースウォーカーMGSPWのメタルギアZ E K E
《ジーク》からとりました。

いろいろパクツちゃってますけど、どうかお許しを！

またどんどん仲間増やそうと思います！

次回、ファイヤー山脈登頂！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4879i/>

あるエルレイドの物語

2010年10月14日15時11分発行